

近藤清石著  
山口縣史畧

長門國之上

四

庫文閣内			
函架	三册	三六五四〇號	和書類

閣 4

地 七 五

内閣文庫		
番號	和	36540
冊數	6 ( 4 )	
函號	140	305



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





國史圖書印

用5

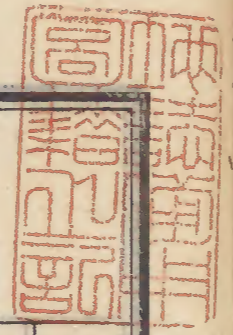


長門國古八郡圖  
中興元年

長門國古八郡圖







山口縣史略卷第四

山口縣士族近藤清石著

長門國之上

長門國沿革總論

本國上古ハ二箇國ニテ一ヲ阿武國ト

云ヒ武今郡阿一ヲ穴門國ト云フ今厚

美福大津成務天皇即位四年國造ヲ定

ム後二箇國ヲ合セテ長門國トス蓋天

皇即位三年五郡アリ曰ク厚狹曰ク豐浦曰

山口縣史略

卷之四

一

博古堂藏



ク美禰曰ク大津曰ク阿武國府ヲ豐浦  
 郡豐浦ニ置ク守介掾目之ニ居リ國事  
 ヲ掌ル西蕃ノ入朝スルカ爲メニ穴門  
 館ヲ置キ臨海館マタ臨海樓ト稱ス創  
 建ハ蓋神功皇后攝政年間  
 又太宰府ニ次クノ邊要タルヲ以テ長  
 門城ヲ築キ天智天皇四年  
 同即位三年長門關ヲ置  
 ク豐前國門司本國ニ屬ス支關ヲ置ク  
 創建年紀詳ナラス以上ノ府城館關  
 ノ廢スル何レノ知ララス故ニ本國國司ハ天武  
 天皇ノ時畿内及ヒ陸奥ト同シク大山

位大山位上中下ノ三階アリテ其上ハ  
 後ノ從六位上中ハ從六位下ハ正  
 七位上以上ノ人ヲ任シテ自餘ニ殊ニ  
 シ清和天皇ノ時國司ニ帶劔ヲ賜ヒ其  
 後郡司書生ニ至ルモ帶仗セシム治承  
 四年源平二氏ノ亂起リテ壽永二年ニ  
 至リ安徳天皇ノ西狩スルヤ本國爭戰  
 ノ區トナリ四年壇浦ノ役ニ終レリ其  
 ノ年頼朝守護地頭ヲ置キ終ニ王制地  
 ヲ拂フニ至レリ北条氏執權スルニ及



ヒテ見ル所アリ。竊ニ王制ニ基キテ。特ニ長門探題ヲ置ク。元弘三年後醍醐天皇隱岐國ヨリ伯耆ノ船上山ニ還幸シ。綸旨ヲ下シテ勤王ノ兵ヲ諸國ニ徵スルニ當リ。國人厚東武實。豐田胤藤等之ニ應シ。探題北条時直ヲ撃テ之ヲ走ラス。建武元年武實ノ功ヲ賞シテ守護職ヲ賜フ。是ヨリ先キ王綱解紐ニ際シ。土豪各一方ニ據守シ。一郡ニシテ二三ノ

郡司ト稱スル者アリ。故ニ各稱呼ヲ異ニシ。豐浦厚狹ノ二郡。自ラ豐東豐西豐田厚東厚西ト分レテ五郡トナル。武實胤藤モ亦其土豪ノ一ナリ。是ニ至リ中興ノ業成ルトイヘ氏。郡名ノ濫稱ヲ改ムルニ及ハス。再ヒ南北兩朝ノ爭亂トナリ。周防ノ大内弘世來リテ本國ヲ略ス。豐田氏等皆其ノ破ル所トナル。獨リ武實ノ曾孫義武父子之ト抗セシカ。遂



ニ克ツ丁能ハスシテ本國全ク大内氏  
ノ併吞スル所トナレリ。大内氏既ニ厚  
東豊田等ノ舊族ヲ併ス。其舊族ノ立ル  
所ノ郡名古ニ復スヘキニ置テ問ハス。  
反テ吉田ノ一郡ヲ設ク。大内家壁書寛  
正二年ノ奉書  
及ヒ毛利輝元ノ氷上山興隆寺二月會  
永祿三年同十一年天正二年ノ差定ニ  
吉田郡弘治三年ニ至リ大内氏滅ヒ毛  
利氏ノ分國トナル。毛利氏モ亦郡名ノ  
濫稱其ノ慣習久シキヲ以テ俄ニ改正

即位元年當紀元  
六百三十二年

セス。寛文四年ニ至リ漸ク古ニ復シ。別  
ニ大津郡ノ見島郷ヲ割キテ一郡ヲ立  
ツ。是ニ於テ始メテ六郡トナレリ。明治  
二年藩籍ヲ奉還ス。是レ則チ本國沿革  
ノ概略ナリ。  
垂仁天皇御代意富加羅國ノ王子都怒我阿  
羅斯等投化シ。穴門ニ至ル。國人伊都々比  
古偽リ國王ト稱シ。曰ク。吾ヲ除キテ復ニ  
王ナケレハ他ニ往ク勿レト。都怒我阿羅

山口縣史略

卷之四

四

博古堂藏



斯等伊都々比古ノ王ニ非ラサルヲ察シテ遁ル。紀日本

紀元七百九十一年

成務天皇即位四年二月二日。事周防ノ部ニ見ユ。

紀元七百九十五年

五年九月。同上。

紀元八百五十三年

仲哀天皇即位二年熊襲反ス。天皇親征ス。六月十日穴門ニ幸シ。豐浦津ニ泊ス。七月五日皇后ノ船豐浦津ニ至ル。是日皇后如意珠ヲ海中ニ得タリ。九月天皇宮室ヲ穴門ニ興シテ之ニ居ル。是ヲ穴門豐浦宮ト名

紀元八百五十九年

ツク。紀日本

八年正月四日天皇筑紫ニ進幸ス。時ニ岡

縣主祖熊鰐。岡ハ今ノ筑前國遠賀郡周芳ノ沙磨ノ浦

ニ参迎シ。魚塩地ヲ獻シ。穴門ヨリ向津野

ノ大濟ニ至ルヲ東門トシ。向津野ハ今ノ筑前國宇佐郡

津野ヲ本國大津郡向津具トス。向津具ハ今ノ筑前國津野郡名籠屋ノ

大濟ヲ西門トシ。名籠屋ハ今ノ筑前國遠賀郡名籠屋ノ

島。今ノ筑前國遠賀郡阿閉島。今ノ筑前國遠賀郡ヲ限リテ

御宮トシ。柴島。今ノ筑前國遠賀郡ヲ御願トシ。逆見



紀元百六十年

海ヲ以テ塩地トナサント奏言ス。逆見海

海美祿郡三見村ノ既ニシテ熊罥ニ海路ヲ導カシメ。廻テ岡ノ津ニ進ム。伊觀縣主祖五十迹手伊觀ハ今ノ筑前國怡土郡穴門ノ引島今豐浦郡ニ参迎シ。瓊鏡劔ヲ獻ス。紀日本

九年。是ヨリ先キ天皇熊襲ヲ撃ツ。克メス。二月五日。檀日宮今ノ筑前國糟屋郡香推ニ崩ス。皇后秘シテ喪ヲ發セス。竊ニ天皇ノ遺屍ヲ收メテ。大臣武内宿禰ニ付シ。穴門ニ還シ。豐

紀元百六十年

浦宮ニ殯ス。舊址今ノ豐浦郡豐浦村極樂寺ノ後山ニ在リ十二月。是ヨリ先キ皇后熊襲ヲ平ラケ。新羅ヲ討チ。三韓ヲ略シテ筑紫ニ還リ。是ニ至テ征韓從軍ノ神表筒男神中筒男神底筒男神ノ神誨ヲ奉シテ。祠ヲ穴門ノ山田村ニ立テ。今ノ豐浦郡楠乃村國幣中社住吉神社是ナリ穴門直祖踐立ヲ神主トシ。其荒魂ヲ祀ル。紀日本

十年二月。皇后筑紫ヨリ穴門ノ豐浦宮ニ移リ。天皇ノ喪ヲ收メテ京ニ向フ。紀日本



紀元二百二年

欽明天皇即位二十二年。穴門館ヲ修治ス。日本

紀元二百七年

二十八年。部周防ノ見ユ

紀元二百六年

考德天皇大化二年。同上

紀元二百十年

六年正月九日。穴戸國造首ノ同族美祿郡及比

山ニ白雉ヲ獲タリ。麻ハ今ノ美祿郡及比

ノ民方ノ地。其二月九日。國司草壁連醜經

之ヲ獻ス。祥瑞ニ合スルヲ以テ天下ニ大

赦シ。元ヲ白雉ト改メ。鷹ヲ穴戸ノ境ニ放

紀元二百五年

天智天皇四年八月。達率荅怱春初ヲ遣ハシ

城ヲ長門國ニ築ク。日本

即位三年二月。又一城ヲ築ク。同上。址詳ナラ

ス。長門國誌ニ。豐浦郡前田村ノ茶臼山ナ

ラ。唐檣山アリ。蓋シ此ノ韓人ニテ。ソレハ

ク。沃ナレハ。後ニカレト山ト云ルヘキ。ヒ

山縣朝聖

卷之四

博古堂藏



トツト音通ヘリ。土人ハ唐權山ト書ケトカラウト山ト唱フ。

紀元千三百三十五年 天武天皇即位五年正月廿五日。詔シテ畿内

及ヒ陸奥長門ヲ除クノ外ハ皆大山位以

下ノ人ヲ國司ニ任ス。紀日本

紀元千三百四十四年 十三年十月。部事周防ノ見ニ

紀元千三百五十六年 文武天皇即位二年九月廿八日。金青綠青ヲ

獻ス。續日本紀日

紀元千三百六十年 四年八月十日。白龜ヲ獻ス。續日本紀日

紀元千三百七十二年 大寶元年八月廿一日。部事周防ノ見ニ

紀元千三百七十五年 慶雲二年四月廿二日。鈴二口ヲ賜フ。續日本紀日

紀元千三百八十七年 四年五月。部事周防ノ見ニ

紀元千三百八十八年 元明天皇和銅元年五月廿九日。甘露降ルヲ

奏上ス。續日本紀日

紀元千三百八十九年 元正天皇養老五年八月十九日。按察使ヲ置

ク。周防石見ヲ管ス。續日本紀日

紀元千三百九十二年 七年十月八日。勅シテ按察使所治ノ國ニ

ハ博士醫師ヲ補ス。自餘ハ並ヒニ之ヲ停

續日本紀日



紀元千三百九十年

聖武天皇天平二年三月十三日周防國出ス

所ノ銅ヲ本國ノ鑄錢ニ充ツ

續日本國鑄錢司建

置年曆詳ナラス舊址豐浦郡豐浦村字逢坂ユリ今ニ猶和銅開珍ノ錢型ヲ

出タス

紀元千三百九十五年

六年正月九日本連理ヲ獻ス

續日本紀

紀元千三百九十六年

七年八月大宰府疫アリ本國ヨリ以還ノ

諸國ニ勅シテ守若クハ介ニ齋戒シ道饗

祭祀ヲ專ラニセシム

續日本紀

紀元千三百九十八年

八年七月十日疫飢ノ民ニ賑給ス

續日本紀

紀元千四百九年

十年八月廿六日

事周防ノ部ニ見ユ

十二年九月藤原廣嗣反シ兵ヲ筑前ニ舉

ク東海東山山陽山陰南海ノ五道ニ勅シ

テ軍一萬七千人ヲ徵發ス會遣新羅使船

來泊ス大將軍大野東人之ヲ奏狀ス廿一

日東人ニ勅シテ船上ノ物ハ當國ニ蔵メ

シメ使中人ノ採用スヘキ者ハ之ヲ任用

セシム是日豐浦郡少領外正八位上額田

部廣麻呂東人ノ令ヲ以テ精兵四十人ヲ



將ヲ發ス。豐前ニ渡リ板櫃津營ヲ鎮ス。明年閏三月五日。廣麻呂軍功ヲ以テ外從五位下ニ叙ス。

續日本紀

十三年三月。

事周防ノ部ニ見ユ。

紀元千四百年

淳仁天皇天平寶字七年八月。

同

紀元千四百廿七年

稱徳天皇神護景雲元年四月廿九日。豐浦團

毅外正七位上。額田部直塞守錢百萬稻一

萬束ヲ獻ス。外從五位上ニ叙シ。豐浦郡大

領ニ任ス。

續日本紀

紀元千四百廿八年

二年三月朔日。山陽道使藤原雄田麻呂奏

言ス。本道ハ郡ノ傳路遠クシテ多ク民苦

ヲ致ス。乞フ隸驛ヲ復シテ遞送セン。又長

門國豐浦厚狹等ノ郡蚕ヲ養ハシムヘシ。

乞フ調ノ銅ヲ停メテ綿ヲ代ル輸サシム

ント。詔シテ之ヲ許ス。

續日本紀

紀元千四百三十二年

光仁天皇寶龜三年十月十日。

事周防ノ部ニ見ユ。

紀元千四百三十七年

八年十一月十八日。白雉ヲ獻ス。

續日本紀

紀元千四百四十年

十一年七月十五日。

事周防ノ部ニ見ユ。



紀元千四百五十六年

桓武天皇延曆十五年正月白雉ヲ獻ス日本  
逆史

紀元千四百六十二年

二十一年九月事周防ノ  
部ニ見ユ

紀元千四百六十五年

平城天皇大同元年五月十四日敕ス備後安  
藝周防長門等ノ驛館モト蕃客ニ備ルヲ  
以テ瓦葺粉壁ニス頃年百姓疲弊シ修造  
ニ堪カタシ或ハ蕃客ノ入朝スル者アラ  
ハ海路ヨリ入ラシメヨ其破損スル者ハ  
農閑ニ修理スヘシ但長門國驛ハ近ク海  
邊ニ臨ミ人ノ見ル所トナル特ニ勞ヲ加

紀元千四百七十二年

ヘテ前制ニ減スル勿レ其新造スル者ハ  
定様ヲ待テ之ヲ造ルヘシト七月四日勅  
ス曰ク關津ノ制ハ衆違ヲ察スルカ爲ナ  
リ苟モ阿容アラハ何ソ朝憲ヲ設ケ今  
聞ク長門國司勘過理ヲ失シ衆庶嗷々タ  
リ自今以後更ニ然ルヲ得ス若シ違犯ア  
ラハ特ニ重科ニ寘カント日本  
後紀  
嵯峨天皇弘仁二年十二月太宰府本國ニ牒  
ス對馬島ニ新羅ノ警アルヲ以テ舊例ニ



准シ要害ヲ護ルヘシト。翌年正月之ヲ停

日本後紀

五年十月十三日。新羅商人三十一人。豐浦

郡ニ漂着ス。日本後紀

八年五月飢。廿一日。賑給ス。日本逸史

九年三月七日。本國國司ヲ改メテ鑄錢使

トシ。長官一員。次官一員。判官二員。主典三

員。鑄錢師二員。造錢型師一員。史生五員。卜

定<sup>△</sup>。國司ヲ復スルノ年月詳カナラス。八月七日。勅シテ部

紀元千四百七十四年

紀元千四百七十七年

紀元千四百七十八年

内不要ノ驛家十一町。馬五十五匹。朝使往  
還ノ要ナク。公民守飼ノ費アルヲ以テ。毎  
驛匹ヲ置キ。自餘ハ鑄錢ノ鉛駄ニ充ツ。日本

逸史

十一年二月十四日。鑄錢使判官一員。主典

一員ヲ省ク。日本逸史

紀元千四百八十年

淳和天皇弘仁十四年七月十九日。本國鑄錢

ノ勞他國ニ異ニシテ。連年旱疫。人民乏絶

ナルヲ以テ。當年ノ庸ヲ免ス。日本逸史



紀元千四百九十年

天長七年五月廿二日。外島一處ヲ勅旨島

トス。島内ノ公私ノ田地。公驗灼然ナルハ

此例ニ在ラストス。日本逸史七月十四日。旱損

ヲ賑給ス。同上

八年飢。十月二日。賑給ス。日本逸史

紀元千四百九十五年

仁明天皇承和元年三月五日。事周防ノ部ニ見ユ

二年二月十五日。鑄錢司職ノ交替前格四

年ヲ改メテ六年ト定ム。類聚國史五月。飢。八日

賑給ス。續日本後紀

紀元千四百九十七年

四年二月十二日。貢調ノ期正月ヲ改メテ

四月トス。續日本後紀

紀元千五百一年

八年三月廿九日。貢調ノ期ヲ舊ニ復ス。續日本後紀

八月廿一日。勅シテ大宰府ニ下ス。驛

傳ノ官符。并ニ彼府ノ言上解文ヲ。路次ノ

諸國本國關司等ノ各閱見スルヲ禁ス。又

四畿六道ノ内。一箇國ヲ指シテ下ス所ノ

符ハ。同シク開クヲ過ム。同上十二月廿二

日。渤海客徒。賀福延等。一百五人來着スル



紀元五百三年

十年十二月九日入唐留學天台宗僧圓載  
ノ弟子仁好順昌等歸朝入新羅人張公靖  
等二十六人ト本國ニ來著セリ。續日本後紀

紀元五百十年

文德天皇仁壽元年十月八日康麻ノ誤ニテ蓋美祿郡大

嶺村鎮坐村社集福大津郡今ノ澁木村賀

下領八幡宮磨能峯蓋美祿郡大津郡界ノ今ノ花尾山ニ

社壬生美祿郡嘉萬上社等ノ四神ニ並ニ從

五位下ヲ授ク。實錄

紀元五百十二年

二年五月甘露降ル。實錄

紀元五百十五年

齊衡二年八月牛一身兩頭ノ犢ヲ産ム。實錄

實錄

紀元五百十九年

清和天皇貞觀元年正月廿七日從五位下佳

吉荒魂神ニ從五位上ヲ授ク。三代實錄二月廿

五日詔ス本國ノ醫師從八位下海部男麻

呂ヲ採銅使トシ三箇年内進ル所ノ銅鉛

年別各三千斤ニ足ル者須ラク五位ヲ借

授スヘシ其後三年内此數ヲ減セサレハ



紀元千五百二十年

隨テ真トナサント。上同

二年。疫癘死スル者甚多シ。三代實録

紀元千五百廿一年

三年八月十七日。賑給ス。三代實録

紀元千五百廿二年

四年五月二十日。事周防ノ部ニ見ユ。

紀元千五百廿三年

五年十月二日。採銅所ノ雜色四人勘籍ニ

預カラシム。三代實録十二月廿一日。勅シテ國

司ニ帶劔ヲ賜フ。上同

紀元千五百廿四年

七年五月十六日。事周防ノ部ニ見ユ。

紀元千五百廿六年

八年三月七日。上同十七日。本國及ヒ豐前等

ノ國司ヲ譴責ス。曰ク。關司出入理過所ヲ用ウ。而ルニ今唐人京ニ入ル。任意經過ス。是レ國宰督察ヲ慎マス。關司過所ヲ責メサルノ致ス所ナリ。今ヨリ以後若シ驚忽アラハ。必嚴科ニ處セント。三代實録五月廿一日。重テ下知シ。關門ノ禁ヲ嚴ニス。上同十一月十七日。勅シ曰ク。迺者怪異頻リニ見ル。之ヲ審覈ニ求ムルニ。新羅ノ賊兵常ニ間隙ヲ窺フ。突變ノ發ル。唯斯事ニ縁レリト



夫レ災ヲ未兆ニ攘ヒ賊ヲ將來ニ遏ム唯  
 是レ神明ノ冥助豈人カノナス所ト云ハ  
 シヤ宜ク能登因幡伯耆出雲石見隱岐長  
 門大宰等ノ國府ヲシテ幣ヲ境邑ノ諸神  
 ニ班チ以テ鎮護ノ殊功ヲ祈ラシムヘシ  
 又如聞差ス所ノ健兒統領ノ選子等苟ニ  
 人流ニ預カルモ曾テ才器ナシ徒ニ爪牙  
 ノ備ヲ稱スレモ蟻螂ノ衛リニ異ナラス  
 況ヤ復教サルノ民何ソ非常ノ敵ヲ禦カ

紀元千五百廿七年

シト。  
 上同  
 九年五月廿六日八幅ノ四天王像五鋪ヲ  
 造リ本國及ヒ伯耆等ニ各一鋪ヲ下シ國  
 司ニ下知ス曰ク地西極ニ在リ堺新羅ニ  
 近シ警備ノ謀當ニ他國ニ異ナルヘシ宜  
 ク尊像ニ皈命シ勤誠ニ法ヲ修シテ賊心



ヲ調伏シ。災變ヲ消却スヘシ。仍テ地勢高  
 敞ニ賊境ヲ賧瞰スルノ道場ヲ點擇スヘ  
 シ。若シ道場ナクンハ。新ニ善地ヲ擇ヒ。仁  
 祠ヲ建立シテ。尊像ヲ安置シ。國分寺及ヒ  
 部内練行精進ノ僧四口ヲ請シ。各像前ニ  
 當リ。叡勝王經四天王護國品ニ依リ。晝ハ  
 經卷ヲ轉シ。夜ハ神咒ヲ誦シ。春秋二時別  
 ニ。一七日清淨堅固ニ。法ニ依リ薰修セヨ  
 ト。三代四王院ハ。豐浦郡村四王寺山  
 實錄其舊址ナリト云フ。因云。史ニ亦見

紀元千五百九年

十シト云ヘ氏。周防國ニモ吉敷郡長野村  
 山中ニ。四王寺ノ舊址アリテ。立石ト稱ス  
 ル。巨石ニ。梵字三。及ヒ南無當來導師歎勒  
 慈尊ノ十大字ヲ彫レリ。  
 十一年二月二十日。太政官處分シテ採長  
 門國銅使ヲ遣ハス。丁ヲ停メ。國宰ニ科テ  
 採進セシム。三代實錄十二月二日。史生一員ヲ  
 省キ。弩師一員ヲ置ク。同上  
 十二年四月五日。太宰大貳藤原冬緒上言  
 ス。比年ノ間公私ノ雜人。或ハ陸。或ハ海ヨ  
 リ來集シ。深ク入り遠ク尋ネテ。善馬ヲ營

紀元千五百三年



求シ其歸向スルニ及ヒテ多キ者ハ二三  
 十少キ者ハ八九疋。総テ過所年ニ出關ノ  
 數ヲ計ルニ九千餘疋。夫レ機急ノ備ハ馬  
 尤用ヲナス。而テ無頼ノ輩毎年搜取ス。若  
 シ罄乏アラハ非常ヲイカンセン。今將ニ  
 禁制ヲ施サントス。翻テ謗讟ヲ致サン。望  
 ミ請フ豊前長門兩國ニ下知シ。四箇年間  
 馬ヲ出ス丁ヲ禁止セント。是ニ至リ勅シ  
 テ本國ニ馬ヲ出ス丁ヲ禁ス。  
三代實錄

紀元五百卅三年

十五年十一月七日。詔シテ四王院沙彌教  
 勝教林二人ニ度ヲ賜フ。是ヨリ先キ九年  
 始テ四王院ヲ置キ。四僧ヲ安置スルニ。教  
 勝等預テ四人ノ内ニ在リ。仍テ特ニ度ヲ  
 賜ヘリ。  
三代實錄 十二月十五日。從五位下忌宮  
 神豐浦郡豐浦村鎮坐縣社ニ從五位上ヲ授ケ。正六位  
 上武智石打命神所在詳ナラス。蓋豐浦郡綾羅木村鎮坐村社宇津幡宮。  
意父神。豐浦郡生倉村鎮幡宮。土地神阿武  
堀内鎮坐御社。並ニ從五位下ヲ授ク。  
同





山形縣史 卷之四

紀元五百卅五年

十七年十月八日、從五位上住吉荒御魂神  
ニ正五位下ヲ授ク。十二月五日、從四位上  
ヲ授ク。本書從四位下住吉荒魂神從四位上トアリ。從四位下ニ叙セシ月日

脱三代實録

紀元五百卅八年

陽成天皇元慶二年六月廿三日、著龜邊警ア  
ルヘキヲ告ルヲ以テ、本國及ヒ伯耆等五  
箇國ニ勅シテ、人兵ヲ調習シ、器械ヲ修繕  
シ、斥候ヲ戒慎シ、要害ヲ固護シ、灾消異伏  
ハ佛神ニ皈依シ、亦境内群神ニ幣ヲ班テ、

紀元五百卅九年

四天王ノ像前ニ調伏法ヲ修セシム。三代實録

三年十月十五日、本國及ヒ太宰府豐前等

ノ國、境内ノ馬ヲ出スヲ禁ス。三代實録

紀元五百卅三年

七年、稔ラス。三代實録

紀元五百卅四年

光孝天皇元慶八年八月廿八日、去年登ラス。

民ニ宿儲ナク、苗種下サス、農業廢ルヘキ

ヲ以テ、正税三萬束ヲ部内百姓ニ班給ス。

三代實録

紀元五百卅五年

仁和元年三月十日、太政官處分シ、本國ニ



紀元千五百四十七年

下知シテ銅手一人掘穴手一人ヲ豊前國ノ採銅使ニ送ル。豊前國民未夕其術ニ習サルヲ以テナリ。三代實錄

紀元千五百四十八年

二年十一月十一日。本國軍毅一人主帳一

人ニ始テ職田ヲ給ス。三代實錄 十四日。從四位

上住吉荒魂神ニ正四位下ヲ授ケ。從五位

下宮城神所在詳ナラス。蓋シ阿武郡嘉年下村鎮坐村社八幡宮ノ末社同

村三原明原神社ニ從五位上ヲ授ク。三代實錄

紀元千五百四十七年

三年三月十一日。國司上言ス。民部省式ニ

曰ク。凡調庸ヲ貢スル。長門國ハ明年四月

ヲ限ル。伊豫國ハ二月ヲ限ル。但宇和喜多

ノ郡ハ三月ヲ限ル。越後佐渡隱岐ハ七月

ヲ限ル。自餘ハ令ノ如シ者。又曰ク。未進調

庸ノ物。伊豫國宇和喜多ノ兩郡ハ。明年六

月晦日。越後佐渡隱岐ハ十二月晦日以前

ニ進訖ル者。又齊衡二年五月十日ノ格ニ

曰ク。當年ノ未進來年究ノサル者ハ。主計

寮具ニ未進ノ數ヲ録シ。明年三月以前主

山縣地志 卷之四 二十 博古堂藏



稅察ニ移シ。即予國司公解ニ役ス者。今案  
スルニ。伊豫國宇和喜多ハ三月ヲ以テ貢  
調ノ期トシ。猶六月晦日ヲ以テ未進ヲ究  
ルノ期トス。長門國ハ四月ヲ以テ貢調ノ  
限トス。未進ヲ究ルノ期隨テ其程アルヘ  
クシテ。未夕別制アラス。但其格文ニ稱ス  
ル所。明年三月以前ヲ以テ公解ニ役スル  
ノ限トナス者ハ。是調物當年ノ貢諸國ニ  
納ルカ爲ニ制スル所ナリ。而テ所司偏ニ

未進ヲ究ムルノ期ト稱スル。明文アルコ  
トナシ。調物當年ノ貢諸國ニ納ルノ例ニ准  
シ。明年三月以前ヲ以テ公解ニ役スルノ  
限トナサン。事格式ノ外ニ出ツ。甚國宰ノ  
愁タリ。望ニ請フ。伊豫國宇和喜多ノ兩郡。  
并ニ越後佐渡等ノ國ノ例ニ准シ。未進ヲ  
究ムルノ期ヲ延ヘ。公解ニ役スルノ責ヲ  
免カレシト。勅シテ之ヲ聽ス。三代實錄  
醍醐天皇延喜十四年八月十五日太政官厨

延喜十四年



紀元... 卷之四

紀元... 七年

家勤行スヘキ五箇條ヲ符ス長門國綿三  
 百九十八斤米三百斛トス政事要略  
 延長五年十二月延喜式成ル書中載スル  
 所本國ニ係ル者左ノ如シ其神祇式ニ曰  
 少允住吉社長門國封租穀者ハ封戸ノ徭  
 夫ヲシテ運送セシム運功ヲ除クノ遺ハ  
 徭分ヲ進メシメ修社料ニ用ウ但豐浦郡  
 封戸徭夫ハ便チ御蔭社ニ充ツ又曰ク長  
 門國五坐豐浦郡五坐大三坐小二坐住吉

坐荒御魂神社並名神大忌宮神社杜屋神  
 社坐黑井村鎮其内藏式ニ曰ク諸國年料供  
 進曝黑葛百斤白玉一千丸麻子二斛カマ十  
 枚カリヤス安料一千圍以上ノ物品近江丹波越前越中志摩常陸下野武蔵  
 下三品本國ノ交易ノ産物以蔵下胡粉二十斤綠青二十  
 斤丹六十斤右長門國交易所進又曰ク諸  
 國年料供進櫛子周防長門各四合其民部  
 式ニ曰ク允未進調庸物長門國伊豫國ノ  
 宇和喜多ノ兩郡ハ明年六月卅日又曰ク

山... 卷之四 廿二 博古堂藏



山陽道長門國中管厚狹豐浦美禰大津阿武右ヲ遠國トナス又曰ク年料別納租穀長門國二千卅七石又曰ク年料別貢雜物長門國收牛皮八張又曰ク諸國貢蕪番次長門國八壺並ニ小一升右ヲ第六番ト爲ス子午年又曰ク年料雜品長門國瓷器大椀五口徑各九寸五分中椀十口徑各七寸小椀十五口徑各六寸茶椀廿口徑各

五寸花盤卅口徑各五寸五分花形塩杯十口徑各三寸磁十口大四口小六口又曰ク交易雜物長門國鹿革廿張胡粉廿斤綠青廿斤丹六十斤海藻一百五十斤苔二十五枚搗子四合其主計式ニ曰ク長門國行程上二十一日下十一日海路二十三日調ハ綿絲雜類但大津阿武ノ兩郡浮浪人ノ調ハ採銅鉛料ニ充ツ庸ハ綿米ヲ輸ス中男ノ作物ハ紙胡麻油薄鰻雜腊海藻又曰ク

允諸國貢調庸ハ長門國四箇月ヲ限ル又曰ク山陽道長門國中管厚狹豐浦美禰大津阿武右ヲ遠國トナス又曰ク年料別納租穀長門國二千卅七石又曰ク年料別貢雜物長門國收牛皮八張又曰ク諸國貢蕪番次長門國八壺並ニ小一升右ヲ第六番ト爲ス子午年又曰ク年料雜品長門國瓷器大椀五口徑各九寸五分中椀十口徑各七寸小椀十五口徑各六寸茶椀廿口徑各

山口縣史



貢夏調絲長門中絲其主稅式ニ曰ク長門國正稅公廨各十萬束國分寺料一萬束文殊會料一千束修理官舎料二萬束池溝料一萬束救急料六萬束兵糧料四萬束又曰ク採銅鉛料稻斤別三束九把六分七厘五毛ヲ充ツ又曰ク祿物價法絹八五十五束絲ハ八束鐵ハ六束又曰ク驛馬直法上馬ハ三百五十束中馬ハ三百束下馬ハ五十束驛馬死損長門十分ニ損二分ヲ許ス又

曰ク諸國運漕雜物功賃長門國陸路六十  
 三束海路國ヨリ與ヨ等津ニ漕スル船賃一  
 束五把挾杪四十束水手卅束自餘ハ播磨  
 國ニ准ス但挾杪一人水手二人米五十石  
 ヲ漕ス又曰ク元長門國四王寺修法料稻  
 四千六百六十八束四把三百束八四王燈  
 油料八百六十二束四把八同四王修供并  
 二四僧童子四人食料千七百八十二束八  
 僧四口二季法服料千七百廿四束八同僧



布施料當國正税ヲ以テ之ニ充ツ又曰ク  
 凡鑄錢年料銅鉛長門國銅二千五百十六  
 斤十兩二分四銖鉛千五百十六斤十兩二  
 分四銖其兵部式ニ曰ク長門等本國トモ  
 國ノ國ノ郡司書生等ハ並ニ帶仗ヲ聽ス  
 又曰ク諸國健兒長門國五十人又曰ク諸  
 國馬牛牧長門國宇養馬牧宇養ハ舊址詳  
 真木村或ハ豐浦郡宇養十ヲス大津郡  
 賀村十リトモ云フ角島牛牧豐浦郡又曰  
 ク諸國器仗長門國甲二領横刀五口弓二

十張征箭二十具胡縵二十具右毎年造ル  
 所又曰ク諸國驛傳馬阿潭蓋合木田村厚狹埴  
 生狹郡以上厚宅賀今村小軀門赤間關ノ今  
 上許北郡以各二十匹阿津今村厚廉野廉野  
 野ノ誤ニテ美祢郡大意福今上於福村田  
 嶺村ノ今ノ美祢郡大津郡參見今ノ阿武郡  
 宇村ノ大津郡三隅以上大參見今ノ阿武郡  
 美祢郡殖田今村小阿武今村大宅佐今  
 郡高佐小川武郡以上阿各三匹其典藥式ニ曰ク  
 諸國年進料雜藥長門國十三種牛膝ニスク藥



山 口 縣 史 卷 之 四

茯苓各三斤。白朮二斤。藍漆。巴戟。天黃根各一斤。細辛七斤。白礬石三斤。蛇床子五升。桃仁四升。葶藶子。蜀椒各二升五合。其内膳司式二曰ク。諸國貢進御贄年料。長門國稱海藻一百四籠。其左右馬寮式二曰ク。諸國所貢繫飼ノ馬牛。長門國牛二頭。

紀元六百二十年

村上天皇天德四年九月廿八日。

事周防ノ部ニ見ユ。

紀元七百九十年

崇德天皇大治五年三月十九日。本國及七山城等ノ六箇國ニ賑恤ス。

中右記

紀元千會四三年

安徳天皇壽永二年七月。是ヨリ先キ治承四年。源頼朝義仲等以仁王ノ令旨ヲ奉シテ兵ヲ舉ケ平氏ヲ討ス。コヽニ至テ義仲京師ニ入ルヲ以テ。平宗盛天皇ヲ挾ンテ筑前ニ奔ル。玉海百練抄平家物語源平盛衰記九月。尾形惟義宗盛ヲ攻ム。宗盛敗レテ小船ニ乗シ海ニ泛フ。本國當時平知目代紀光季民部大輔紀伊刑部大輔通資ニ作リ。長門本平家物語平家物語キ。大船百三十餘艘ヲ點進ス。宗盛之ニ移

山口縣史

卷之四

共六

博古堂藏



紀元八百四十四年

リ讚岐ニ赴キ、宮殿ヲ屋島ニ造リ、南海山陽ヲ徇フ。源平盛衰記 平家物語

三年二月、平氏天皇ヲ奉シテ福原ニ還リ、一谷城ニ據ル。愚管鈔 東鑑 豐東郡司秀平、豐西

大夫良親、厚東入道武道道ハ蓋ノ誤等赴援ス。源平盛衰記 九月、賴朝ノ弟範賴、義經一谷城ヲ

陷ル。平氏屋島ニ逃ル。源平盛衰記 平家物語 是年、飢饉ス。東鑑

紀元八百四十五年

四年正月十二日、是ヨリ先キ範賴九州ニ

渡ラントシ、豐浦郡赤間關ニ下向ス。糧ナク船ナキヲ以テ周防ニ引還ル。東鑑 二月、義

經屋島ヲ襲撃ス。宗盛天皇ヲ挾ンテ西奔シ、廿一日、豐浦郡彦島古ノ引ニ來リ之ニ

據ル。源平盛衰記 平家物語 義經從フテ周防ニ下ル。三浦義澄ノ嘗テ門司ニ下リシノアルヲ

以テ嚮導トシ、三月廿三日本國ニ來リ、豐浦郡壇濱ノ沖、奥津邊津合ノ満珠ニ錨ス。

平氏彦島ヲ發シテ豐前國田浦沖ニ逆フ。



廿四日壇浦ノ海上ニ戰フ。午尅ニ及ヒテ平軍敗レ。宗盛虜セラレ。知盛等死ス。二位、左寶劔ヲ持シ。按察局天皇ヲ抱テ海底ニ没ス。是ヨリ先キ一箇ノ大龜海上ニ浮ミ。後陸地ニ上ル。漁人恠シミ。之ヲ範頼ニ獻ス。其重サ六人ノ力ニ餘ル。兵士甲ヲ放タント相議スルニ。範頼夢ミルコトアリテ。簡ヲ付シ之ヲ海ニ放ツ。平軍敗ル。ニ及ヒテ龜再ヒ源氏ノ舟前ニ浮ミ出ツト云フ。

四月五日。勅使大夫尉信盛下向ス。義經ノ軍功ヲ賞シ。神器ヲ無異ニ入レ奉ルヘキ由ヲ義經ニ仰ス。東鑑十一月。頼朝奏請シテ每國ニ守護地頭ヲ置ク。上同

紀天皇幸

後鳥羽天皇文治二年七月二十八日。是ヨリ

先キ頼朝豐西郡司弘元ノ平氏ニ與ミセシヲ以テ。其所帶地大津郡向津ムカヅ與莊イヅク向津向津ノ村具具ヲ没收シ。景國ヲ地頭ニ補ス。景國新日吉領向津莊ヲ掠ム。六月一日。帥中納言



經房之ヲ頼朝ニ奉書ス。頼朝景國ニ參洛シテ事由ヲ陳シ。天裁ヲ仰キ。魚ニ濫行ヲ止メ。社家使ノ進止ニ隨フヘキヲ下知シテ。請文ヲ奉ル。

東鑑

三年七月二十日。是ヨリ先キ壇浦ノ役ニ寶劔紛失ス。嚴島神主安藝介佐伯景弘ニ命シ之ヲ求メシム。得スコノニ至リ伊勢已下七社ニ奉幣シテ。寶劔ヲ得ニ。下ヲ祈リ。使ヲ本國ニ下シ。景弘ト共ニ寶劔ヲ海

紀元八百五十七年

紀元千八百十九年

中ニ求メシム。東鑑

五年。是ヨリ先キ本國阿武郡平氏ノ所領ニテ。没官領内タルヲ以テ。土肥實平西國下向ノ時ヨリ知行セリ。繼テ頼朝實平ノ子遠平ニ與ヘテ相傳ス。後御造作抽取ノタメ。地頭職ヲ去リ。之ヲ進上スヘキヲ勅詔ス。仍テ頼朝遠平ニ代官退去ヲ命セシニ。猶代官ノ者居住ノ聞アリテ。重テ早ク代官ヲ退去セシメ。阿武郡ノ地頭職ヲ停



止スヘキ廳宣ヲ下ス。二月三十日。賴朝遠平ニ代官ノ者郡内ヲ退去セシムヘキ状ヲ下ス。東鑑

紀元八百五十二年

建久二年。勅シテ安德天皇ノ御影堂ヲ豐

浦郡赤間關ノ阿彌陀寺ニ建ツ。玉海幣中社

赤間官是ナリ。

紀元八百五十五年

六年。是ヨリ先キ文治年中嘉祥寺領棚庄

按スルニ棚ノ上川字ヲ脱セルニテ。川棚庄ナルヘシ。川棚ハ豐浦郡ニアリ。地

頭職ヲ停止ス。而ルニ猶守護人領家ノ所

務ヲ妨クルヲ訴フルヲ以テ。之ヲ關東ニ

糾ス。十一月四日。賴朝之ヲ停止ス。東鑑

紀元八百五十八年

順德天皇建曆元年。釋俊仍明州ノ賴長六カ

船ニ乘シ宋ヨリ還ル。阿武郡ニ着ス。元亨釋書

紀元八百六十二年

後堀河天皇貞應二年十一月。厚狹郡山野井

正法寺住僧大賢新券ヲ立テ。國裁ヲ蒙ラ

シ。之ヲ解ス。本寺ハ花山天皇ノ勅願寺ナ

ルカ。源平ノ兵燹ニ罹リ。往古ノ流記縁起

等焼失シ。勅免ノ料所ヲ押領セラレ。修治



ノ功ヲ勵ムトイヘ氏成ラサルヲ以テナ  
リ。古文書

紀元百三十五年

龜山天皇文永九年四月十六日豐浦郡豐浦

火アリ。十六戸堂一宗古文書

紀元百卅五年

後宇多天皇建治元年四月十五日是ヨリ先

キ元屢使ヲ我ニ遣ハス。鎌倉執權北条時

宗拒テ納レス。吉續記五代帝王物語客年十月ニ至

リ。虜對馬ニ寇シ。次テ筑前ヲ犯シ。沿海郡

邑ヲ掠ム。太宰府兵之ヲ拒ク。利アラズ。既

ニシテ賊船二百餘隻漂没ス。餘賊遁レ去

ル。一代要記皇年代畧記保曆間記關東評定傳八幡愚童訓東寺長者補任日蓮注

十一月復寇ス。一代要記增鏡コ、ニ至リ元主

牒ヲ齎シ。杜世忠何文著撤都魯丁等ヲ遣

ハス。本日豐浦郡室津ニ至ル。八月之ヲ關

東ニ送致ス。九月七日時宗之ヲ鎌倉ノ龍

吟ニ斬首ス。關東評定傳帝王編年記

弘安四年是ヨリ先キ元使太宰府ニ至ル。

復之ヲ博多ニ斬ル。關東評定傳元主我再ヒ使

紀元百卅五年



東夷傳 卷之四

者ヲ斬ルヲ憤恚シ。高麗ノ舟師ヲ合セ。五月太宰府ニ入寇ス。閏七月朔日。颶風大ニ起リ。虜艦ヲ敗ル。我兵掩撃ス。虜死スル者十萬有幾。元帥忻都茶丘范文虎等纔ニ免カ。ル。

一代要記。歴代皇記。八幡惡童訓。皇年代畧記。皇代畧記。保曆間記。增鏡。關東評定傳。當時ノ記。録ニ。木國虜患ヲ被レ。高麗史。丁ヲ記。スモ。終ニ。豐浦郡赤間關阿彌陀寺。八幡宮ノ縁起ニ見ル。ノミ。然レ。氏大津郡。元兵ト戦ヒシト云フ。處アリ。テ。其墓モアリ。又阿武郡。菽ニコク。リ。カ。埃ト称スル地アリ。テ。菽地ノ方言ニ。物ノ疾走スルヲ。コク。レ。モ。ク。レ。ニ。コ。ク。レ。バ。高麗埃。コク。レ。モ。ク。レ。

ハ。高麗蒙古ナルヘケレハ。本國沿海ノ地ハ。虜患ヲ被レ。ル。丁。分明ナリ。コノ時。高麗ノ兵員。高麗史。忠烈王六年。紀ニ。小國已備。兵船九百艘。稍工水主一萬五千名。正軍一萬名。兵糧以漢石計者十一萬。什物機械不可縷數。庶幾盡力以報聖德。同八年。紀ニ。各道按廉使。啓東征軍九千九百六十名。稍工水手。口。萬七千二十九名。其生還者一萬九千三百九十名。ト見ユ。

紀元九百九十九年

伏見天皇正應二年十一月。本國內ノ大社大

寺ニ。明年十月ニ至リ。異國降伏ノ祈禱ヲ

修セシム。コノ事。六。古文。年ニ及フ。

紀元九百九十九年

後醍醐天皇元弘三年閏二月。天皇隱岐國ヨ

山口縣史

卷之四

卅二

博古堂藏



リ伯州船上山ニ還幸シ。太平記 綸旨ヲ諸國ニ下シ。王ヲ勤メシム。鏡 是ニ於テ厚東武實高津入道道性豐田胤藤。河 河越安藝守等兵ヲ舉ケ本國探題北条時直ヲ逐フ。

太平記 天正本

建武元年厚東武實ニ守護職ヲ賜フ。守護代記 武實氏ハ物部其先守屋大連ニ出ツ大連ノ孫武基。按ルニ遠孫 厚狹郡ニ居リ始テ厚東大夫ト稱ス其玄孫武晴カ子武光厚

紀元九百十四年

紀元九百十五年

東郡司トナル城ヲ末信村ノ霜降山ニ築キテ之ニ居ル武實ソノ七世ノ孫ナリト云フ。系圖 五月十四日入府ス。守護代記 二年正月上野四郎及ヒ越後二郎入道等國府下山城ニ據テ叛ス大介藤原季道カ男彌五郎季親之ト戰フ十日ヨリ十八日ニ至ル。古文書 既ニシテ武實反シテ足利高氏ニ與ス。太平記 延元元年足利高氏京師ニ敗レ鎮西ニ奔

紀元九百十六年



ル。二月二十日。豐浦郡赤間關ニ至リ。廿九日。筑前國葦屋ニ濟ル。追討ノ兵ヲ防クカ爲ノ。武實ヲ本國ノ守護トシ。且一族高經修理ヲ留メ以テ大將トス。四月。高氏大舉シテ攝津ニ上ル。太宰府ヲ發シテ府中ニ來リ。滯在スル丁數日。武實兵船ヲ沙汰スルニ。豐浦郡串崎ノ船頭ニ。往昔壽永元曆ノ壇浦ノ役ニ。源義經ノ衆セシ十二艘ノ船頭ノ子孫ナリト云フ者アリテ。義經戰

捷ノ後。此船ニ於テハ日本國中ノ津泊ニ於テ。公役アルヘカラスト。自筆ノ下文ヲ與ヘタルヲ所持セリ。武實佳例ノ船ナリト其船頭ノ船ヲ以テ。高氏ノ兼船ニ點定ス。梅松同書ニ高氏播磨ノ室ニテ。船頭ノ兼船ノ名ヲハ今度船ト号ス。長門國阿武郡椿浦ノ船頭孫七畏リ申シケルハ云々。ト見エタル。椿浦現今ソノ地名ナシ。余幼年ノ時。故人靜間三積ニ椿浦イッコナルカヲ質問セシニ。今ノ萩ノ地。椿郷ノ浦ニテ。イニシヘハ椿浦ト云ヒケシ。後ニツルハキノツ字省カレテハキノト云ヘリキ。





山形縣史 卷之四

紀元二千五年

後村上天皇興國七年三月五日高氏厚東武

村取河ヲ守護ニ補ス系圖守武村ハ武實

ノ子ナリ武實正平三年

正平六年十月十日武村卒ス子武直駿河

後長門守繼ク十一月十三日府中ニ發向シ

光富ノ要害ヲ攻メ豊田種本太郎左ヲ斫

ル古文十二月二十日守護ニ補ス系圖守

茲年厚東郡棚井村東隆寺ニ厚東武實ノ

安國禪寺ノ額ヲ賜ヒ寺位ヲ諸山ニ班

紀元二千十一年

シ山井郷ヲ常住ノ莊園ニ充ツ開山南嶺

八年十二月二十日武直卒ス子義武長門

尉嗣ク守護ニ補ス系圖守

十年周防ノ南軍大内介弘世來リ本國ヲ

討ツ系圖

十二年六月廿三日弘世本國守護職ニ補

ス守護

十三年正月二日義武霜降山城ヲ棄テ遁

ル系圖

紀元二千十七年

紀元二千十八年

山形縣史 卷之四 廿五 博古堂藏



紀元二十九年  
十四年二月廿六日弘世豐浦郡四王寺山  
城ヲ拔キ厚東某名知レス本書及七富永  
又三郎按ルニ小ヲ斬ル代守護

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

紀元二十九年

十四年二月廿六日弘世豐浦郡四王寺山  
城ヲ拔キ厚東某名知レス本書及七富永  
又三郎按ルニ小ヲ斬ル代守護  
十八年春弘世歎ヲ足利氏ニ納レ防長二  
國ヲ賜ハラシテ請フ是ヨリ先キ足利  
氏厚東駿河守ヲ以テ守護トス是ニ於テ  
弘世カ請ヲ聽シ駿河守カ守護職ヲ視ヒ  
弘世ニ與フ駿河守南軍ニ降ル太平記  
建徳元年三月十一日弘世住吉神社ヲ修

造シ臨時祭ヲ執行シテ參詣ス代守護是日  
リ先キ丁酉歲正平十一年本國及七九州ノ敵  
ヲ退治センコトヲ祈リ社頭修造等ノ状ヲ  
捧ケシヲ以テナリ南山巡狩録

後龜山天皇文中三年九月弘世ノ子義弘本  
國守護職ニ補ス翌年三月廿一日入府ス

代守護

天授六年五月十日義弘叔父師弘ト榮山  
在所詳ニ戦ヒ叔智淨等廿七人ヲ斬ル花

山ノ系史

卷之四

廿六

博古堂藏



紀元二千五十九年

三代記守系圖南十一月十五日弘世卒ス方紀傳

後小松天皇應永六年十月義弘謀反ス第盛

見ヲ留守トシ新介弘茂ヲ具シ和泉ニ東

上ス十二月廿九日義弘戰死ス弘茂降ル

前將軍義滿弘茂ニ防長ニ國ヲ賜フ應永

方紀傳京都將軍家譜王代一覽

紀元二千六十年

七年七月弘茂盛見討伐ノ台命ヲ奉シテ

下向ス古文書盛見豐後ニ遁ル守護十月二

十四日遊行十世尊觀法親王豐浦郡赤

紀元二千六十年

間關專念寺ニ寂ス法親王ハ龜山天皇ノ

皇子恒明親王ノ第四子ニテ後村上天皇

ノ御養子ナリト云フ寺傳ノ外別ニ徵ヲ見スト云ハ氏御墓ヲ取レリハ之

八年十二月廿六日盛見豐後ヨリ長府ニ

還リ弘茂ト四王寺山ノ毘沙門堂ニ戰フ

弘茂カ軍盛見ノ敗ル所トナル廿九日マ

タ下山ニ戰フ弘茂敗死ス守護代記盛見

律成寺ニ居ル守護律成寺舊址忌宮神社代記ノ西南宇切通ニアリ



山口縣史 卷之四

紀元二千六十二年

九年正月盛見山口ニ還ル代守護記七月盛見

叔重綱伯耆守等ヲ遣ハシ弘茂ノ黨厚西郡

下津井シモツヅ地頭箱田弘貞伊賀守ヲ擊ツ弘貞長

光寺山今ノ下津ノ後山ニ拒戦シ主從三十

六人鬪死ス洞玄寺縁起

紀元二千九十年

後花園天皇永享三年六月廿八日盛見筑前

ニ陣没ス系圖南方紀傳古文書

紀元二千九十二年

四年二月十三日盛見ノ弟持盛豐前ヨリ

還リ入府ス代守護記

紀元二千九十二年

五年四月八日持盛弟持世ト豐前ニ戦フ

テ敗死ス薩戒記南方紀傳白寄八幡宮棟札系圖

紀元二千百年

十二年四月二日持世住吉神社ヲ修理シ

テ之ニ詣ス一宮大宮司次第記

紀元二千百年

嘉吉元年七月廿八日持世京師ニ卒ス姪

教弘嗣ク南方紀傳大内家壁書海東諸國記

紀元二千百年

寛正二年六月廿九日訴人ノ申状ニ因テ

山口ヨリ分國中ノ行程日數ヲ定ム本國

八大津郡二日路半請文十一日豐東郡二

山口縣史

卷之四

卅八

博古堂藏



日請文九日。豐西郡二日。但宇賀河棚ニ至  
 テ二日。路半請文十一日。豐田郡二日。但神  
 田阿川粟野ニ至テ二日。路半請文十一日。  
 厚狹郡ハ二日。但津布田埴生ニ至テ二日。  
 路半請文十一日。吉田郡二日。請文七日。厚  
 東郡一日。請文七日。美禰郡一日。但厚保一  
 日。路半請文八日。阿武郡福田ニ至テハ二  
 日。小川ニ至テハ二日。路半請文十一日。椿  
 三見地福得佐生雲一日。請文七日トス。  
大内

家壁書

紀元二千五百五年

六年九月三日。教弘卒ス。子政弘嗣久。  
系圖重編

應仁記長祿寬正  
 記齋藤親基日記

紀元二千五百九年

後土御門天皇文明元年五月。是ヨリ先キ應

仁元年。山名宗全。細川勝元。兵ヲ洛中ニ構  
 ス。政弘山名ニ黨シ。東上在京ス。政弘ノ伯  
 父道頌家督ヲ奪ハント欲シ。歎ヲ細川ニ  
 納レ。兵ヲ赤間關ニ舉ク。  
系圖。王代一覽。京  
 都將軍家譜。重編

應仁記。應仁別記。陶  
 弘護肖像。贗古文書。



紀元五百三年

二年正月、客年十一月道頓幕府ノ命ヲ以テ安藝ニ赴ク。周防ノ玖珂ニテ陶弘護ノ要撃スル所トナリ、敗レテ石見ノ吉見信頼守能登ニ憑ル。信頼之ヲ庇ス。コヽニ至リ兵ヲ出シ阿武郡ヲ掠ム。阿武郡内ニ吉見領アリ。阿武郡ヲ掠ムルハ其領外ナリ。既ニシテ其軍潰ユ。道頓豐前ニ奔リ、馬岳ウカダケニ死ス。陶弘護肖像贊古文書。

三年正月元日、末武氏左衛門大夫久信頼ト阿武郡地福ニ戰フ。氏久敗レテ父子三人戰

紀元五百卅五年

没ス。古文書。末武系圖。

七年冬、陶弘護吉見信頼ヲ攻メ、兵ヲ得佐ニ屯ス。古文書。

十四年、吉見信頼降ル。陶弘護肖像贊。

十五年、是ヨリ先キ九年、政弘京師ヨリ山口ニ還ル。陶弘護肖像贊。京都將軍家譜。皇年代畧記。コヽニ至リ九州ヲ略シ、八月一日、軍兵ヲ濟スノ舟自今以後赤間關役ト定ム。大内家壁書。九月、政弘長府ニ出ツ。守護代記。

紀元五百廿三年

紀元五百廿二年

紀元五百廿五年



紀元五百七十七年

長享元年四月二十日、赤間關ヨリ小倉門  
 司、赤坂ニ濟ル、賃錢ヲ定ム、小倉ノ間三文、  
 門司ノ間一文、赤坂ノ間二文、鎧唐櫃十五  
 文、長唐櫃十五文、馬一疋十五文、輿一挺十  
 五文、犬一疋十文ト定ム。大内家  
壁書  
 明應四年九月十八日、政弘山口ニ卒ス、子  
 義興嗣ク。系圖、博法  
泉寺、殿詞  
 後柏原天皇永正十五年十二月十日、豐浦郡  
 赤間關火ク、阿彌陀寺災ニ罹ル。古文  
書

紀元五百七十八年

紀元五百七十九年

紀元五百七十八年

十七年四月、是ヨリ先キ義興山口縣高嶺  
 二神明宮ヲ建ツコ、二至テ成ル、丹土ヲ  
 大津郡見島ニ取ル。高嶺太神宮  
御鎮坐傳記  
 後奈良天皇享祿元年十二月廿日、義興山口  
 二薨ス、子義隆嗣ク。系圖、房頭  
記、古文書  
 二年十二月廿日、阿彌陀寺再建ノ論旨ヲ  
 賜フ。古文  
書  
 天文二年、義隆ニ詔シテ九州ヲ討伐ス、義  
 隆府中ニ出陣シ、兵ヲ九州ニ差遣ス。九州  
記

紀元五百九十年

紀元五百九十三年



紀元千九百九十四年

紀元千九百九十九年

紀元千九百九十九年

紀元千九百九十九年

紀元千九百九十九年

三年冬九州平定ス。義隆山口ニ還ル。義隆記

八年八月四日。豐浦郡大風。忌宮ノ寶殿及

七若宮等破壊顛覆ス。古文書

十八年三月。本國小守護代勝間田盛治左近

將監。長門國守護代記ヲ編ス。

二十年八月廿八日。陶隆房尾張守謀反山口

ヲ襲フ。九月朔日。義隆大津郡仙崎ニ遁レ

船ニ乘ス。風浪ノ阻ル所トナリテ上陸シ。

深川村大寧寺ニ入ル。賊追撃来リ逼ル。義

隆自殺ス。冷泉隆豐大夫判官。黑川隆像近江守。岡

部隆景右衛門大夫。天野隆良藤内。大田隆通隱岐守。

岡屋隆秀左衛門尉。禰宜右延民部少丞。之二殉ス。義

隆ノ男義尊并二二茶良豐左將。中持明院基

規權中納言。及ヒ小幡義實四郎。虜セラレ。翌日害

二遭フ。言延覺書。義隆記。同異本。房頭記。中

十月。隆房名ヲ暗賢ト改ム。陶系圖。古文書。

二十一年三月。晴賢大友。暗英ヲ迎ヘ立ツ。

暗英名ヲ義長ト改ム。義隆記。同異本。言延覺書。吉田物語。是



紀元二千五百二年

年饑饉

詳ニ周防ノ部ニ見ユ

二十二年十月十二日。是ヨリ先キ石見ノ

吉見正頼大藏少輔兵ヲ舉ク。本日阿武郡高佐

原ニ戰フ。十一月三日。池田峠ニ戰フ。十三

日。野坂ニ戰フ。古文書

二十三年三月三日。吉見ノ屬城阿武郡嘉

年城ヲ拔ク。古文書義長ハ渡川村ニ。晴賢ハ

徳佐ニ出陣シ。吉見ノ本城鹿足郡三本松

ヲ攻ム。古文書言八月。正頼降ル。義長山口

紀元二千五百三年

ニ凱旋ス。言延覺書。房頭記。

紀元二千五百七年

弘治二年三月。正頼復タ兵ヲ舉ケ。嘉年城

ヲ復ス。廿五日。木部郷冷村ノ吉部ニ戰フ。古文書

奈古郷鷺江山ニ戰フ。同上

三年三月。義長及ヒ内藤隆世彈正忠山口ヲ

棄テ。豐浦郡且山城ニ據ル。古文書言毛利

兵福原貞俊左近志道元保大藏少輔等追躡シ

テ且山ヲ圍ム。廿八日。且山城外郭陷ル。古文書貞俊使ヲ城中ニ遣ハシ。給キ曰ク。隆世

紀元二千五百十七年



山口縣史略 卷之四

自殺セハ義長ハ敢テ問フ所ニアラスト。  
 隆世之ヲ信シ。檢使ヲ乞ヒ。四月二日。城内  
 二自殺ス。義長城ヲ出テ谷ノ長福寺今ノ功山ノ  
 寺ニ入ル。言延覺書。炭圓覺書。房頭記。古文書。三日。毛利兵之  
 ヲ從フ。義長ノ兵院内濱ニ拒戦ス。古文書。毛  
 利兵之ヲ敗リ。長福寺ヲ圍ム。義長免カレ  
 サルヲ覺リテ自裁ス。叔民部太輔。陶鶴壽  
 丸家人野上隱守之ヲ害シテ之ニ殉死ス。等之ニ殉セリ。言延覺書。  
 貞俊等義長及ヒ隆世ノ首ヲ防府ニ

送ル。元就父子之ヲ檢シテ。長府ニ送還シ  
 長福寺ニ葬ル。古文書。是ニ於テ本國毛利氏  
 ノ分國トナレリ。十二月二十日。内藤隆春  
 左衛門ヲ更ニ本國守護代トス。同隆春ノ上初ノ守  
 護代トナレル  
 年紀詳ナラス。

山口縣史略卷第四 終

山口縣史略

四十四 博古堂藏







